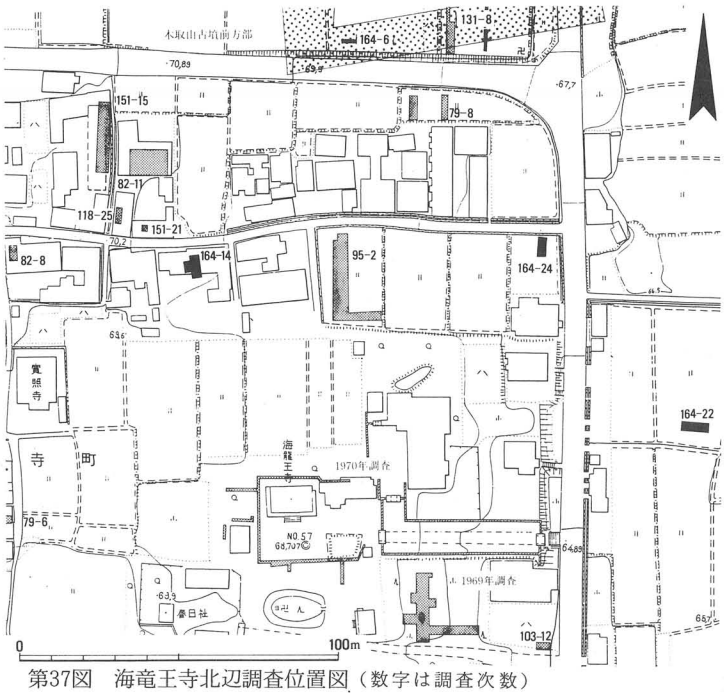
# Ⅲ　平城京内寺院の調査

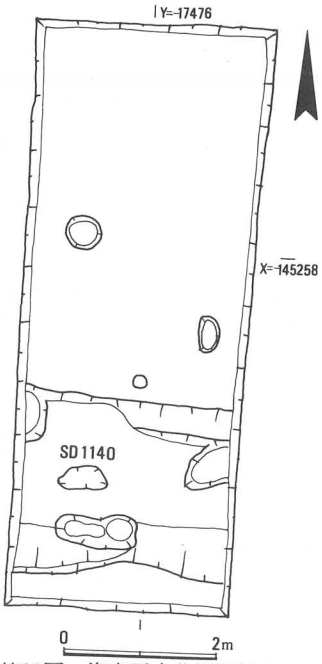
## 1　海竜王寺北辺の調査Ⅰ　　第164－24次

店舗新築に伴なう事前調査である。調査地は海龍王寺の北方で、通称二条通りの一筋南側の小路と海龍王寺の東を区画する道路に面した角地にあり、北側小路に接して南北トレンチを設けた。

当調査地の西約60mに設けた昭和50年度の第95-２次調査（『昭和50年概報』）では、側溝心々間15m（50尺）の東西道路が検出され、今回の調査地においてはその北側溝ＳＤ1140を確認した。北側溝SD1140は幅約２m、深さ60cmの素掘溝である。第95-２次調査検出の北側溝SD1140は側壁を石組としているが、規模は等しく同一線上に位置する。側溝内埋土は大きく上下２層に分かれ、奈良時代の土器（平城宮土器編年Ⅳ～Ⅴ）および軒丸瓦6319Ａ・6282Ba各１点が出土した。




第37図　海竜王寺北辺調査位置図（数字は調査次数）

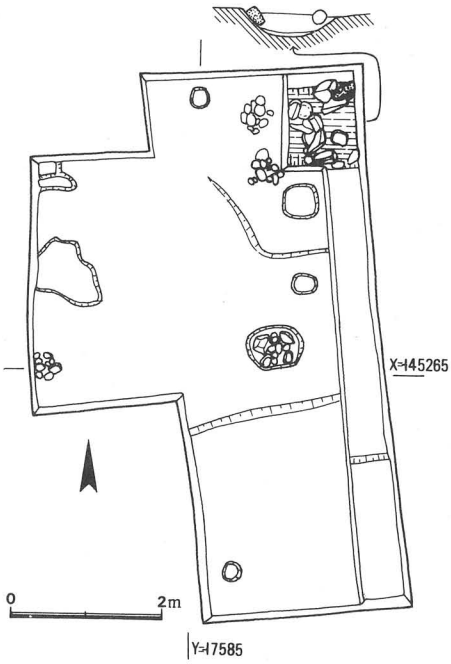



第38図　海竜王寺北辺発掘遺構図Ⅰ（１：100）

## 2　海龍王寺北辺の調査Ⅱ　　第164－14次

本調査は住宅新築に伴なう事前調査である。調査地は、法華寺集落内を通称一条通りに平行して東西に通じる現道路に北面し、海龍王寺の北辺部にあたる。調査は南北に長いトレンチを設けて実施した。

現地表面下約70～80cmで暗灰色の砂質土に達し、この地面で径10～20cm大の自然礫十数個を集めた根石風の遺構４ケ所があった。発掘区のほぼ中央にあるものは、径70cmほどの掘形をもつが、他の集石には掘形がなく、礫も小さいことから、根石とは認めがたい。他に意味不明の土壙数ケ所がある。この砂質土中には、古代の瓦片を含むが中世の瓦器片もあって、集石や土壙も中世頃のものと思われる。この面をさらに約20cm掘り下げると、緻密な黄灰色粘土の地山面がある。地山面の標高は68.3mである。南方ではこの上部に厚さ約10cmの奈良時代の遺物包含層が認められた。また北東部では、時間の関係で一部しか掘ることが出来なかったが、幅約1.2m、深さ約30cmの東西溝を検出した。溝中には人頭大のカナンボ石や面取り加工した凝灰岩断片、瓦、塼類が出土し、奈良時代の溝であることを思わせた。



第39図　海竜王寺北辺発掘遺構図Ⅱ（１：100）

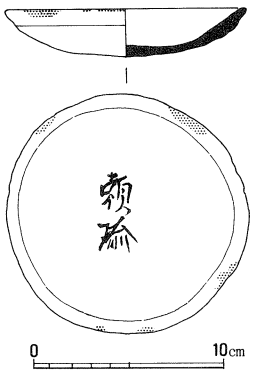
この東西溝は、西では1973年度に実施した第82－８次、東では1975年度の第95－２次（『昭和50年概報』）の両調査で検出した東西溝ＳＤ1140に恐らく直線的に連続するものと考えられる。そしてこの一連の東西溝は、規模に少々違いがあるようだが、法華寺および海龍王寺両旧境内の北辺を東西に走っていた、左京一条々間路に相当する道路の北側溝であろうと考えられる。

## 3　西大寺旧境内の調査

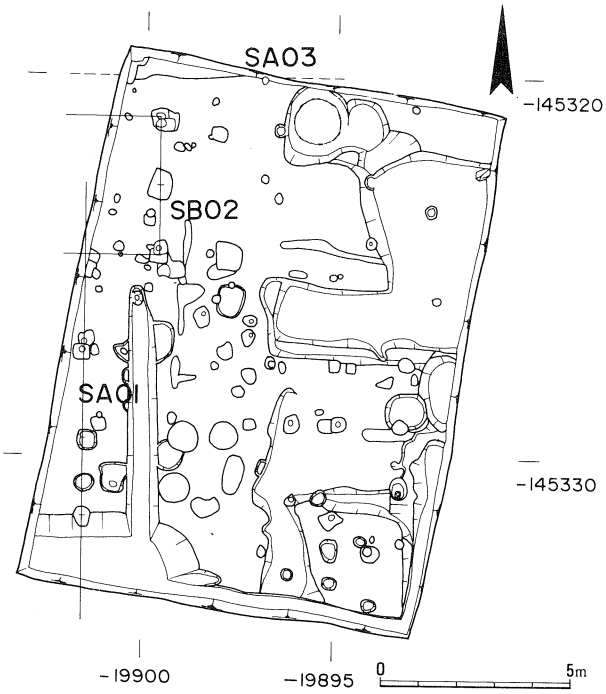
西大寺境内の防火施設工事に伴なう事前調査である。条坊では右京一条三坊六坪に該当し、寺内四王院推定地の西南隅にあたる。現状では西大寺子院の護国院のすぐ東隣にあたる。発掘区の南方は池状の凹地になっている。

発掘区の土層は、近年駐車場とした際の盛土・耕土・床土・水田造成以前の暗褐色又は暗灰色の整地土の順で、あわせて深さ１m前後あり、これらを除くと明黄褐色砂質土の地山面に至る。奈良時代の遺構は掘立柱塀１条、掘立柱建物10棟等である。SA01は2.1m（７尺）等間で３間分検出した。堀形は一辺40cm、深さ30cm、柱径は15cmである。SA02は梁間２間、桁行は１間以上、柱間はいずれも1.8m（６尺）、掘形・柱径はSA01とほぼ同じである。東妻棟通柱掘形には甕が埋められていた。SA03は発掘区北端で検出した東西にのびる地業風の整地層である。一部を検出したにとどまっており性格は不明であるが、築地の可能性がある。

この他に近世の野井戸６基、中・近世の土壙１基、近世以降の池とその導水路各１等を検出している。池埋土中からは「頼瑜」と墨書する灯火器が出土している。また瓦塼類では軒丸瓦（6281B）１点、軒平瓦（6732K）３点、塼が出土している。




第40図　墨書土器（１：４）




第41図　西大寺境内発掘遺構図（１：200）